ことば

「さあ、胸を張って」

柴田　徹
日本放送協会山形放送局　チーフアナウンサー

全国の行政相談委員の皆さん、こんにちは。ＮＨＫアナウンサーの柴田徹です。…とはいっても、山形県以外の皆さんは全く私のことをご存じないかと思います(笑)。少し、自己紹介をさせてください。

山形県山形市に生まれ、高校卒業までを過ごしました。仙台の大学を卒業し、ＮＨＫのアナウンサーとなりました。青森・仙台・神戸・名古屋・東京と転勤を重ね、２００６年６月に生まれ故郷の山形に赴任しました。そしていま「今夜はなまらナイト」という、山形県だけで視聴できる番組を担当しています。最大の特徴は、番組の初めから終わりまで出演者がすべて山形弁で話す、ということです。私が「今夜は？」と言うと、みんなが「なまらナイト！」と応えてくれる番組です(笑)。もちろん、アナウンサーの私も山形弁で進行します。全国およそ５００人のＮＨＫアナウンサーの中で、方言全開で番組を進めているのはたぶん私だけでしょうね。

…まだ、どんな番組かイメージできない方がほとんどですよね？では、番組の成り立ちから今日までを簡単にご紹介します。

きっかけは２００６年の秋でした。その年、全国的にいじめによる子どもたちの自殺が続発、受験に関係ない科目を受験科目に振り替える「高校の未履修問題」が大きな社会問題となりました。山形も例外ではなく、「かつて山形の子どもであり、いま山形の大人となった自分」が何もしないでいいのだろうか、という思いを感じていたとき、現在も番組のレギュラーである脚本家のあべ美佳(山形県尾花沢市出身)さんと出会い、「何ができるだろうか」とすぐに話が熱を帯びて行きました。そして、その結果「俺たちが育った言葉で、俺たちの県のことを、いいことも悪いことも何でもかんでもしゃべっ

てみよう。そんな番組を作ってみよう」となったわけです。そして年が明けて２００７年の1月24日、「今夜はなまらナイト」の記念すべき第1回のラジオ放送が行われました。

出演者はテツandトモのトモ(山形市出身)さん、あべ美佳さん、私と、当時山形局のキャスターを務めていた(もちろん共通語で・笑)藤田千枝(山形県村山市出身)さんで、1時間半にわたって、県人なら誰でも分かる、だけど県人以外は全く分からないような話を笑いながら続けました。リスナーからもご意見をいただこうと、メール・ＦＡＸを募集しました。みなさんもこういった「声を募集する」番組はよく目にするかと思いますが、ご意見を送ったことのある方いらっしゃいますか？そうなんです(笑)、そんなに来ないんですよ、多くの場合。まして、ローカルのラジオ放送ですからそんなに来るはずはないだろうと、私たち自身が思っていました。それが、番組が始まって30分を過ぎたころでしょうか、スタッフが何やら騒がしいのです。聞いてみると、メールが大量に来すぎて、使っているプリンターでは印刷が追いつかないというのです。結局1時間半の放送中に１００通を超えるお便りが寄せられました。その多くは「久しぶりに腹がよじれるほど笑った」「自分も今そこに行って話に加わりたい」というような内容でした。

鍵はおそらく「共感」であろうと私は思っています。山形県民の多くが共有している楽しかった記憶。言葉がダイレクトに感情を刺激する感覚。私たちが方言で話すとき、そこには意味だけでなく「感情」が付随すると感じています。故郷への愛情、失ってしまった時間への思い、今は会うことのない大切な人の記憶…たぶんそれらを、私たちが発する言葉の温度や行間に、聴いてくださった方々がそれぞれに感じてくださったのだろうと思います。

あれから6年半の時間が流れました。番組はいつしかラジオだけに留まらず、テレビのゴールデンタイムでも放送されるようになりました。2度ほど全国放送にもなり、「何言っているか分からないけどものすごくおもしろかった」と他県の方からもお便りをいただきました。自分が思い描いていたよりもずっとずっと大きくなった番組。今年6月、山形市民会館に１０００人近い観客を集め、公開収録を行いました。そしてその模様を73分のテレビで放送中、３００通を超えるお便りが寄せられました。その中にはこんなものもありました。「山形の魅力を再発見し、自分が山形に生まれてよかったと思える番組だ」…はっきり言って、すごくうれしいです。

かつて、私が生まれる少し前、集団就職した先でなまりを馬鹿にされ自ら命を絶った方がいたと聞きました。方言をなくし、共通語で話そうという教育が行われた時代があったと聞きました。いまも、小学生などはほとんど方言を話せないという現実があります。私は方言を保存しようとか、研究しようとか、そういうことを目指しているわけではありません。ただ、胸を張って自分の思いを、自分の気持ちを他者に向けてひとりひとりが発信できる社会であってほしいと思います。そしてそのとき、方言はとても有効なツールだと思うのです。

さあ、胸を張って。「今夜は？」「なまらナイト！」